

都市経済を支えた朽木材

朽木の木材生産

京都や奈良といった都の近くに位置する近江では、古くから都の寺院などの大型建物の造営・維持に必要な木材を切り出すために開発された山（杣）が多く存在しました。また「正倉院文書」において、東大寺の造営を担当する造東大寺司が用材の伐採基地として各地の杣に山作所を設置していたことがわかっており、一説ではその



筏流し

一つが朽木小川にあったのではないかと考えられています。

朽木で切り出された木材は、安曇川の水運を利用して湖岸に運び、琵琶湖上を輸送されました。そのため、江戸時代には安曇川河口の舟木（安曇川町南船木付近）で材木屋が座を形成しており、木材を切り出したたり筏で運搬する人々の支配権や朽木材の直売権を独占していました。こうして、安曇川を利用し、筏で運搬された朽木材は、19世紀半ばには二条城の修築用材や瀬田の唐橋用材などに活用され、昭和まで朽木の代表的な生産業として受け継がれていきました。

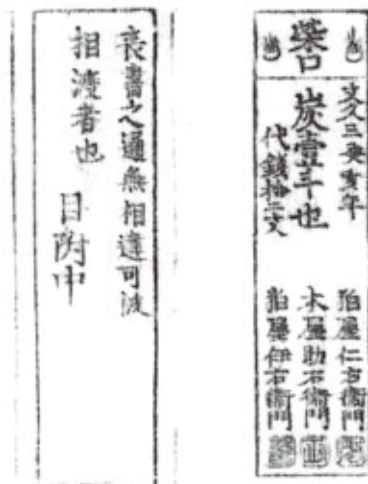
朽木炭の生産

朽木では、その豊かな山林資源をいかした木炭の生産も盛んに行われました。江戸時代に入ると、より質の良い炭を作るため、朽木の木炭生産は次第に朽木氏や御用問屋によって管理されるよう

炭切手 柴口

(裏)

(表)



路が不可欠で、その条件を満たしていたのが高島でした。とくに朽木は、舟木や大溝からの湖上水運の便にも恵まれていたため、朽木の木材生産業は、都市のエネルギー供給を支え、長い間地域経済を支えていました。

関文化財課

☎ (25) 8559

になっていき、幕末には「炭切手」という紙幣も発行していました。木炭については、朽木に炭焼きを伝えたとされている村井と椋川の2か村が運上金の徴収や製造の許可を出す権限を持っており、14か村が製造を許していました。ここで製造された木炭は、木材と同様に水運などを利用して都市部へ供給されました。現在でも、朽木の山には石が積まれた窪みが多数見られ、当時の炭焼き窯の痕跡を確認することができます。

木材や木炭の生産には、山林資源が豊富であることだけでなく、消費地である都市部までの販

編集感

最近、天気予報の精度が向上し、昔と違い天気予報は当たるものになったなとつくづく感じます。台風や大雨の予報は、当たるとうれしくはありませんが、情報を得て、備えることで、被害を少なくすることができます。

今月号の特集は「防災対策」でした。広報誌が情報源の一つとして活用され、特集記事をもとに、一人でも多くの方が災害に備えて行動を起こしていただければいいと思います。

さあ、私は食料の「ローリングストック」から取りかかろうっと！ (YK)



広報たかしま

令和元年

9

月号 No.236

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課
〒522-1106 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740 (25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp